

まじり釘燈籠



## 幼児の心理と幼児教育

波 多 野 完 治

最近における幼児心理学の情勢と、それにとりあがる幼児教育の問題点について話したいと思えます。

幼児教育とは、教育の中でヒューマンステイックな色彩の強い部門であり、いつでも教育のヒューマンイズムが勃興する時は幼児教育から始まります。ポーランドのコメニウスも幼児教育を特別に母親学校としてとりあげることを提案しました。そして、その後も、教育改革は世の中が因襲にしばられて正しい道徳が行われなくなった時なされるものですが、そういうとき、いつも最初になされるのは幼児教育の部門であります。又更に、世の中の因襲にしばられた教育が、世の中に迎合していこうとする時、最後まで抵抗するのは幼児教育であります。我が国においては、戦争中に教育に対して国家

の統制が重くのしかかったことがあります。その時国民学校制度が出来、小学校や中学校はいち早くそれにまき込まれたけれど、幼児教育だけは残っており、最も戦争が進行してから国民保育とされました。しかしそれも関係者達の鎮重な抵抗によってあまり大きな害も残さずにすみ、そして戦後はヨーロッパの幼児教育を進んでとり入れることも行われたのです。このような性格を持つ幼児教育界においても、特に倉橋惣三先生等は幼児教育の中に、自由主義的なヒューマンイズムの線を守りぬくことに貢献なされた方があります。

幼児教育ではヒューマンイズムの線が守りよいということがいわれますけれど、どういう点で守りよいかは、他の教育部門に教えるところが大きいでしょう。

一番守りやすいのは生物学的ヒューマニズムであり、人間性本来の姿で人間性に反するものに抵抗をもち、ヒューマニズムを守りぬくのです。しかしながら人間性を積極的に伸すという面では、幼児教育は必ずしも洞察をもつて動いているとは言い切れないと思います。この問題が最近になって起つて来たので、それを中心として話していきたいと思ひます。

幼児教育の問題としての  
素質と環境

生物的なものと社会的なもの

人間の本性的なものと獲得されたもの

先天的なものと後天的なもの

経験に先立つものと経験的なもの

等の解決は、発達心理学の部門では重要とされています。ある時期には先天的なものが重視され、又ある時期には後天的なものの方が重視されるという交代が、その間には見られま

す。  
一九三〇年頃から今日までに心理学者の理論として支配的であつたのは、マチュレイション（成熟）という問題でありました。これはゲゼルの研究の中に、立派なその結実をみる事が出来ます。即ち、発達因子として成熟ということは非常に大切であり、熟していない場合に練習させることは意味がない、又時には害すらあるという考え方でありま

す。例え  
ば歩行の問題でも、歩行には時期があつて、そのマチュレイションが来れば自然に歩行するのであつて、歩行助成器等使つても使わなくても結果は同じだといふのであります。言葉の獲得についても同様であつて、無理に教えこむことはかえつて人格的、精神的不安を起したりしてよくないし、詰め込まれなかつた子供も一定の時期が来ると追いついてしまつて、教えこんだ効果はみられないといわれています。算数に關しても、数規念は早く教えてみても効果はなく、英国等ではむしろ害をなすと結論してあります。

算数の問題については、英國の心理学者ヴァレンタインが詳しく研究していますが、それによれば、算数は十と十一才位から教えればよく、六才から教える必要はないといひます。ロンドン近郊のある学校では校長が特別なカリキュラムを編んで、十一才から算数を行わせ、十三才までに小学校でやるべき課程を終えるようにしてみたところが、その子弟の方が、普通に六才から始めた子供達よりも、中学入学試験の時の成績は秀れていたといふ結果を得ております。つまり六才位ではまだ原始的オペレイション（仕事の仕方）しかないのに高度の数規念を与えると、それをねじまげて覚え込み、数学に対する規念が悪いものとなつてしまふのです。それが算数規念が充分に成熟してからやれば、二年間において六年分のことがより正確に把握できるといふのです。このこ

とは理論的にも、実験的にも証明されています。唯この場合ヴァレンタインは次のようなことを注意しております。それは掛算とか割算等のマチュレインは十一才位であるけれども、それ以前の基礎的数概念というものは、九才位までにしっかりとつかんでおかねばならないのであって、それすらも十一才頃になってからあわててやっついては間に合わないということです。数概念には、ごく幼い頃から掴み得るものと、高度なものと交っているけれど、結局基礎的なものは前々からやっておかなければ間に合わないのです。もし何もかも算数のことは十一才から始めるとしたならば、国民の文化水準が低くなってしまうと彼は言っております。さて実際問題としては、学者の理論が原理的に正しいことはわかったにしても、それが何才になると適當であるかは残された問題であり、一つ一つ研究していかねばなりません。このようなこともマチュレインションということから非常に重要視されるようになって来ました。

幼児教育に於ては、殊にその時期にあたるものが非常に多いため重視されねばならない事柄であります。例えばはしこ等を上ることは、練習効果はあまりなくて、ある年令になれば特別練習等しなかつた子供がかえつて上手にのぼれるということは、実際よく知られていることであり、このようなマチュアになることを根本においた考え方は、幼児教育のため

まえともよく合致する主張であります。

しかしこれに対して一九四八年頃から米國に反動が起つて来ました。これはヨーロッパの考え方の影響は余りなく、米國独自の立場で起つて来たものであります。一方ヨーロッパでも、伝統的考え方の強いヨーロッパとして、一九三〇年頃からマチュレインションに対する反対説もありましたが、最近それが又強化されて幼児教育に対する修正等も起つたと言われております。このようにヨーロッパにも反対説がありましたが、ここでは特に範圍に於いて主張された、デヴェロッパメンタル・タスク（發達の課題）と呼ばれているものに注目してみたいと思ひます。

これは成熟の考えを全く無視するものではありませんが、成熟の考えの上になつて、それを一定の社会的わくの中に入れていく仕事が幼児教育には重要なことだといふのであります。マチュレインションの問題だけを強調する説に対して、この考え方はマチュアが確かめられたら、成熟の度合に依つて、その年令でなくては出来ない發達の課題をさせるように導びいていくというのであり、つまり幼児の成長の中に教育をもちこんでいくという考えなのです。この説はシカゴ大学のハヴィグハーストによるものであり、教育課程を再び幼児の發達の中に織り込むものとして、最近の發達心理学の中で最も大きな問題とされております。

ハヴィグハーストの論旨によれば、子供には一定の年令に  
応じてどうしてもやらねばならない課題があり、それをすま  
しておかないと上の年令になってから前の年令における課題  
と、今の年令における課題とが重なり、過重にもなり、従って  
発達がおくれるという結果を来したりするというのでありま  
す。そして結局人格的発達が円満にいかなくて、成長した面  
と子供で残っている面とをもつ性格になったりします。幼い  
時から一つの事柄にマチュアにならば、それを社会的環  
境と合せて充分にやっておかなくてはならないのでありま  
す。このような意味から、ハヴィグハーストは、人間の成長  
を、小さい頃、小学校時代、青年期の三つに区分して、夫々  
の発達の課題をあげておきます。

幼い子供の発達の課題を彼は次の九つあげています。

一、歩くことを学ぶ

(これは成熟であるから学ばなくともよいと今迄いわれて  
いた)

二、大人の食物を食べることを学ぶ

三、話すことを学ぶ

四、排泄物処理のコントロールを学ぶ

五、性の区別、及び性的なモデステイ(慎み)を学ぶ

六、生理的安定を確保する

七、社会的又は自然的現実の簡単な概念を形成する

八、両親、兄弟、その他の人々に対して情動的に自分を関係  
させることを学ぶ

九、正しいことと不正のことを区別し、良心を発達させる  
ことを学ぶ

これはマチュレインションの考え方が基礎になっていることは  
確かであり、従ってゲゼルの考えとも思われるけれど、更  
にゲゼルの考え方とジャールドの考え方を二つ並べてみてそ  
の延長の上になつてハヴィグハーストの考方をおいてみる  
と、ジャールドの方がゲゼルの一歩先にあるということも  
判明して来るのであります。ジャールドは発達の原理をい  
くつかあげておりますが、その中に予見的発達の原理とい  
うことがあります。これは発達とは一段階において充分にし  
ておく、次の段階に行つてよい結果が得られるというのであ  
り、そのことを子供は知つてはいないけれど自然に行なつて  
おり、大きくなればよい方向に向いているのだということが  
わかるのであります。これはマチュレインションの考え方に通  
じますけれど、それから一歩進んで将来の人格的発達とい  
うことも考えていると見られます。この考え方とハヴィグハ  
ーストの発達の課題という考え方とを結びつけてみると、ハ  
ヴィグハーストは発達段階を、幼児期、小学校期、青年期の三  
つに区分していますが、小学校の発達の課題のものに照  
応した幼児期の発達の課題があり、又青年期のそれに照応し

た小学校の發達の課題のおかれてゐるのがわかります。つまり第一の幼児段階に於てしつかりした課題をしておく、次の小学校に行つて非常に役立つし、それ自身を發達させることが出来るという考え方を、ハヴィグハーストもつてゐるのです。

この観点から幼児期にどういふものが重要かを考えてみますと、幼稚園児で大切なのは、幼い子供の發達段階の中の、八、九、であることがわかります。生れてから幼稚園入園以前頃までに必要なのは、知的な發達の課題であります。これは概念的知性ではなくて、感覺運動的知性をいゝますが、これが二才半頃までに充分發達しなければなりません。この段階で充分な成熟があると、次に感情的發達が起こります。手足が自由に使え、自由にかつ廻れる頃になると、必ず家庭における社会的制約が多く感ぜられるようになります。欲求不満を起したり、父母に対する感情的反撥が出て来たりします。しかし二才半頃までの時期に充分な發達を遂げた子供は、この欲求不満の時期をのりこえ、うまくこれを処理することが、やがて出来るようになります。幼児期に感情的發達がなされ、感情的統制が出来るようにならないと、小学校に入つてから非常に不自由するようになります。

赤ん坊と二才半……………知的發達

二才半と七才……………感情的發達

七才と小学校終了……………知的發達  
青年期……………感情的發達

幼児期には幼児の感情的處理の發達の課程が充分に行われていなければなりません。が、今までの處理の仕方には失敗した例も多く、これが學業成績の低下を来したり、或いは人格的失格となつたりして相談所に持ちこまれたりしております。ジャーシルドは感情的發達は、知性的發達とも平行しているから自分でコントロール出来るようになるといつてゐます。このように放つておいても自分で統制し、處理出来るようになる場合もありますが、しかし處理しきれぬものは他へそのはけ口をむけなければなりません。

幼稚園では幼児の表現物を通してそれを行わせてゐる例が多いのですが、そういう観方をすれば絵をかかせたりすることとは、表現が上手になるとか、おとなしく遊んでゐることなどよりむしろ發達の課題を果す大切な活動の一つであるといえます。特に感情的統制を表現物を通して行うことは、これが充分でなく處理しきれぬということを、幼児の親や先生等が発見するのに役立つ、統制出来るような方向にむけてやるということの意味があります。

遊びや表現物には、象徴活動という意味も含まれてゐます。木の葉がお皿であり、棒が鉄砲であるというのは、子供が象徴的にそれを転化してゐるからであります。このシンボ

リズムは、本人にはそう見えても他の人にはそうは見えないので、学者はこれを個人的シンボリズムと呼んでおります。そのうちに誰がみても、これはそういうものだと思えるような段階にまで上っていく必要があります。遊びや表現物を通して得るところの知的發達の課題であると同時に、人格的發達の課題でもあります。

このように幼児期が感情的發達をなすのに大切な時期だということ、幼児には独自の教育の方法があるのであって、小学校の二年以上のものを持ちこんで来るのは、危険なことだということがわかります。幼児の發達の課題には、芸術教育の面がかなり重要な要素をなしていることが判明しますが、芸術教育は以前は小学校、中学校の領域であったのが、最近段々に幼児教育の部門に入れられるようになって来ました。これは近來の幼児教育の著るしい特色であります。この芸術教育を通じて個人的シンボリズムを社会化し、一般的シンボリズムともなし得るし、それは他人のシンボリズムをみて理解することを得、従つて他人に対する理解の一つの前提ともなります。表現させる・理解する・他人に同情するという面が次第に大切に扱われるようになって来ました。

幼児の時期は、發達の課題の確保をなし得るにつれて、その時期が延長されるようになって来ました。現在は幼児期は七才頃までと考えられ、その頃までは幼児的取扱いをなされ

ることが必要とされております。即ち現在の心理学の考え方を学制の中にとり入れるならば、幼稚園時代を七才までとするか、それが出来ないならば、小学校の一年生は幼稚園的取扱いをすべきと考えられます。そして七才の時期には、キングダーガルデンクラスというようにするのが希望しいと思われま

す。幼稚園を義務制とするかどうかは難しい問題であります。が、出席を強要しないならばどの子供も皆幼稚園に入れて、幼児の時代から教育を受けるようにするのが本体だと思えます。この時期に感情的統制が充分なされるよう幼稚園でしっかりやっておけば、小学校において知的統制がスムーズに運びます。ところが小学校で知的發達と感情的發達とその統制とを両方為されるとなると、過重になって学習がうまくいかないとというような結果をひきおこします。感情的統制は五才までの幼稚園期において片づけられるべきと思ひます。

今日の發達の課題の考え方は非常に大切な問題であり、今までの幼児教育の中に支配的であつた生物学的ヒューマニズムを一步のりこえて、社会的、人格的ヒューマニズムとして幼児期を見なすようになって来ました。そしてこれに適應した幼児心理学や幼児教育が行われたのは、殊に注目すべきことと思われま